

2005年11月～2006年1月の近畿地域におけるテレメータによる地下水位およびボアホール型歪計による地殻歪（水平3成分）の観測結果を報告する。観測点は21点（観測井は26井戸）である（第1図）。同期中に第1図で示す範囲内で、M4以上で深さ30kmより浅い地震は、2005年11月23日22時24分頃に発生した和歌山県北部の地震（M4.0, 深さ約28km）である。M4以上で深さ30kmより深い地震は、2005年11月1日12時47分頃に発生した紀伊水道の地震（M4.3, 深さ約45km）である。これらの地震前後に特に異常な変化はない。

第2～6図に、2005年8月～2006年1月における地下水位の1時間値の生データと（場所によってはその下に）補正値を示してある。また、第7～11図には同期間におけるボアホール型歪計が併設してある観測点（別紙で報告する ikd, tkz, ikh等を除く）について地下水位とともに歪3成分の観測値（生データ）を示してある。歪の図において「N120」などと示してあるのは、歪の方向が北から120度東方向に回転していることを示す。水位補正値(corrected)は潮汐解析プログラムBAYTAP-GIによって、気圧・潮汐・不規則ノイズの影響を取り除いた後のトレンドである。なお、tkz・obk2・ysk・yst1・yst2・yst3およびbndは地上より上に水位が来るので、井戸口を密閉して水圧を測定し、それを水位に換算している。hks・kwnではケーシングを二重にして、外管で浅い方の地下水位（hks-o, kwn-o）を、内管で深い方の地下水位（hks-i, kwn-i）をそれぞれ測定し、別々の観測井にカウントしている。

htsとkwn-iの地下水位については、2005年4月以降の周囲の揚水によると考えられる水位低下から回復してきている（第4, 5, 11図）。obk2の地下水位については、2005年5月以降の周囲の揚水によると考えられる水位低下からはあまり回復していない（第6図）。2005年12月以降のknmの地下水位の低下は周囲の揚水によるものと思われる（第4図）。yst2については、2005年9月末に水位計が故障した（第7図）。yst2は地上より上に水位が来るので井戸口を密閉していたが、2005年10月24日にyst2の故障した水位計を回収するために井戸口を開放した。その作業に伴い、yst2と同じ帯水層を観測していると思われるyst3の地下水位は2005年10月後半から低下している（第7図）。

これらのデータ（グラフ等）は、<http://www.aist.go.jp/RIODB/gxwell/GSJ/index.shtml>で公開されている。

（北川有一・小泉尚嗣・高橋誠・佐藤努・松本則夫・大谷竜・板場智史・桑原保人・長秋雄・佐藤隆司）

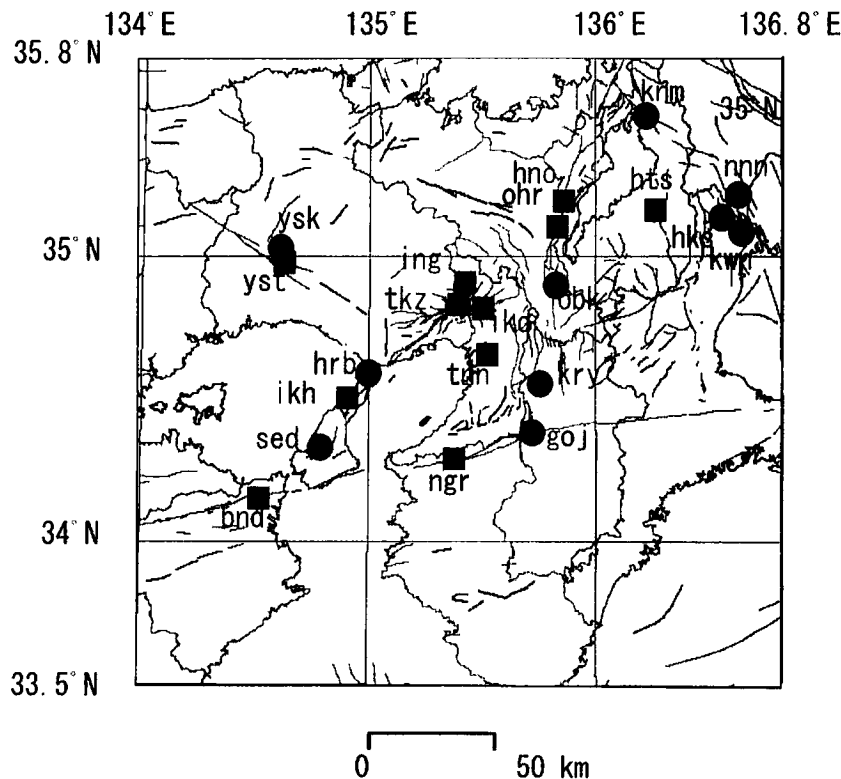


Fig. 1 観測点（●・■）と活断層分布。●は地下水のみの観測点で、■はボアホール型歪計を併設している観測点。

ATMOSPHERIC PRESSURE(ikh)
RAINFALL(ikh)

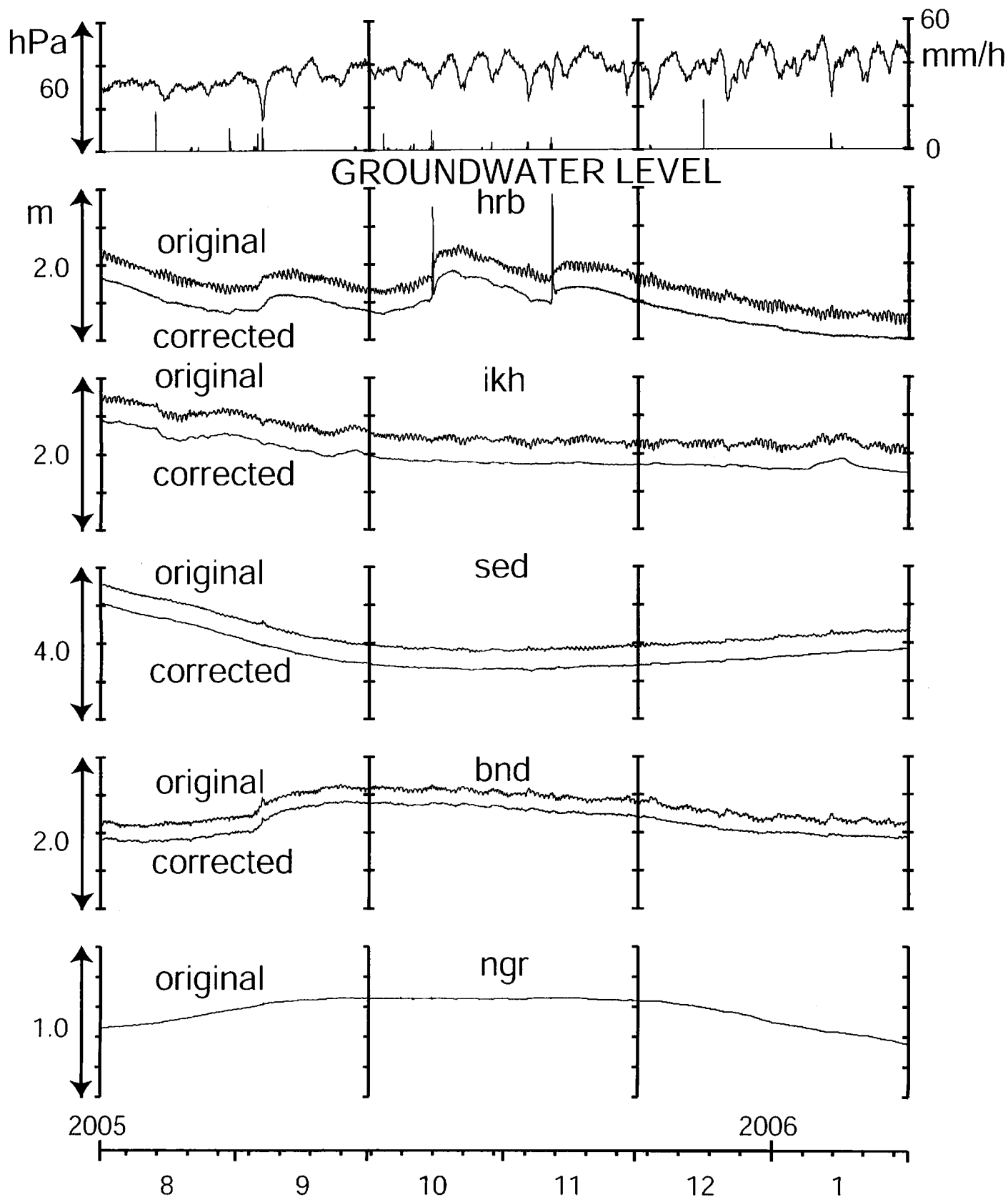


Fig.2

ATMOSPHERIC PRESSURE(ing)
RAINFALL(ing)

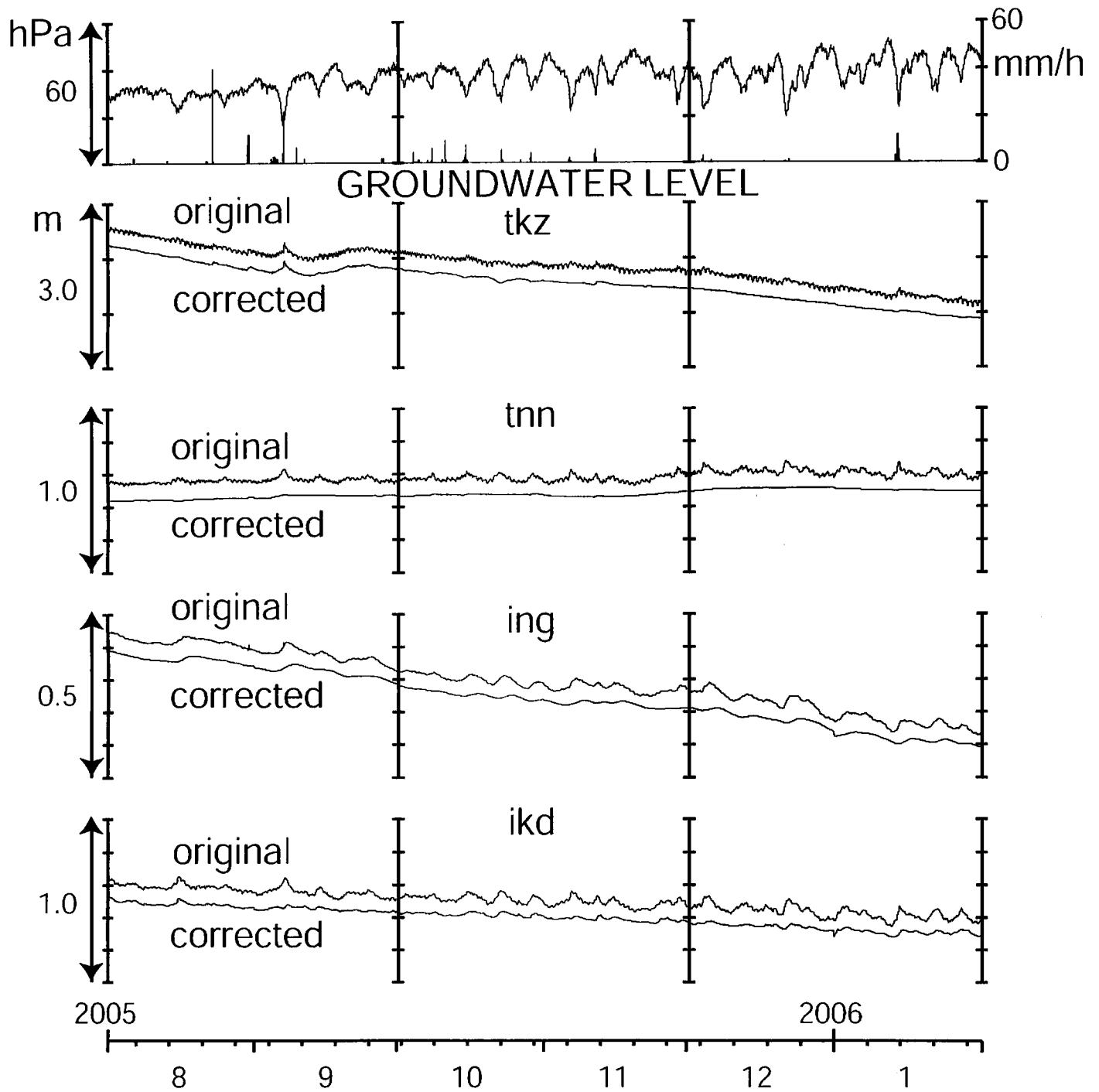


Fig.3

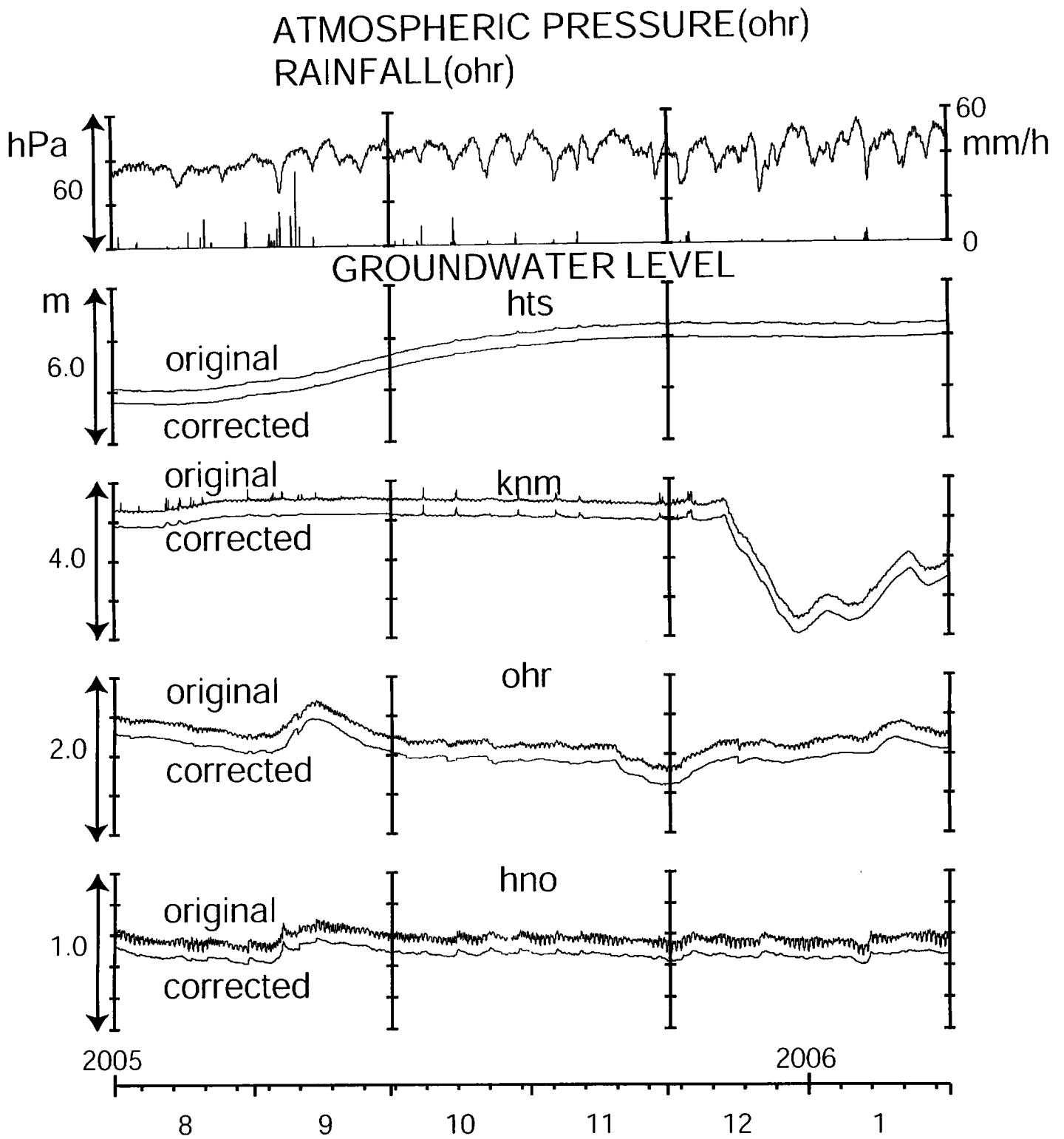


Fig.4

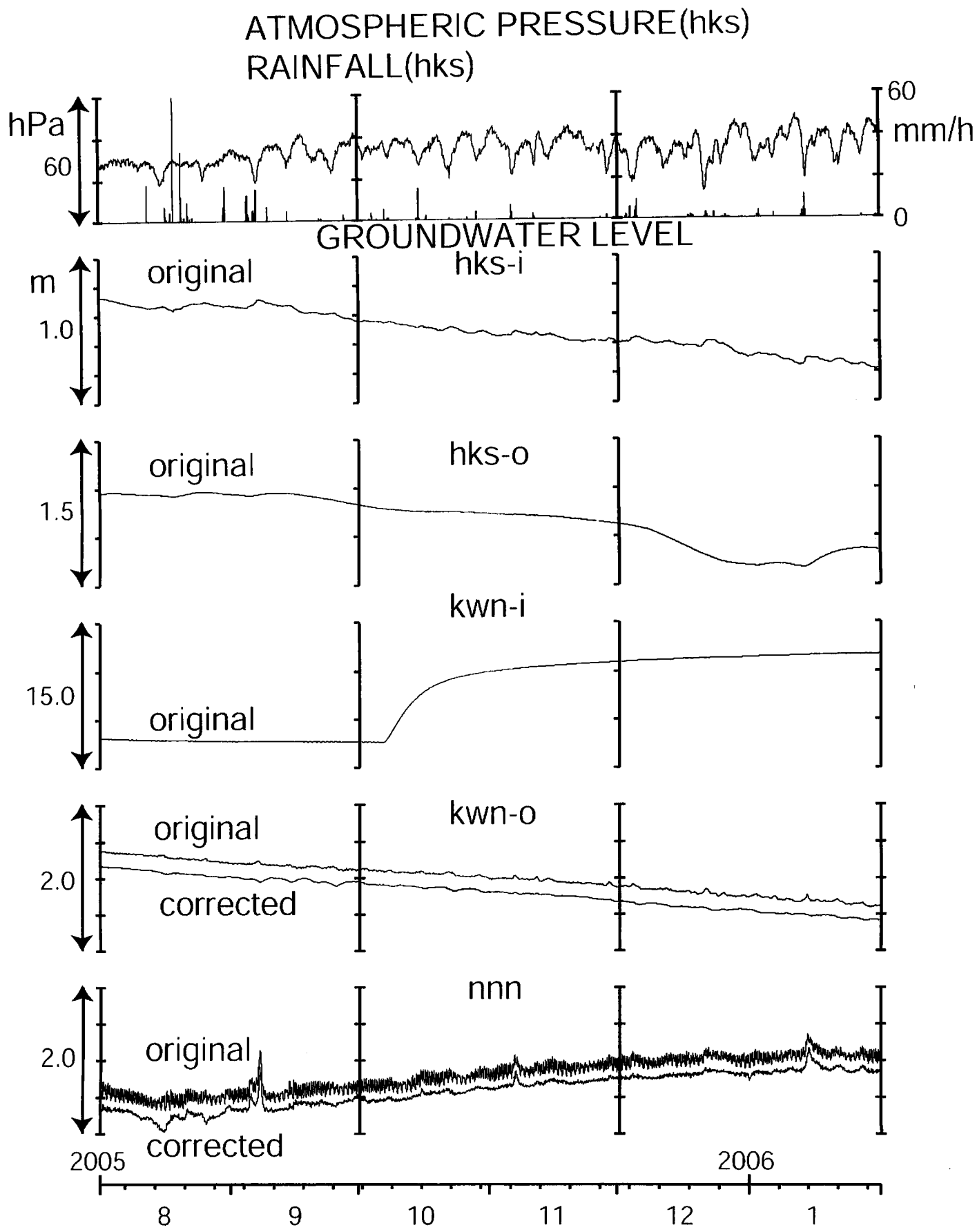


Fig.5

ATMOSPHERIC PRESSURE(obk)
RAINFALL(obk)

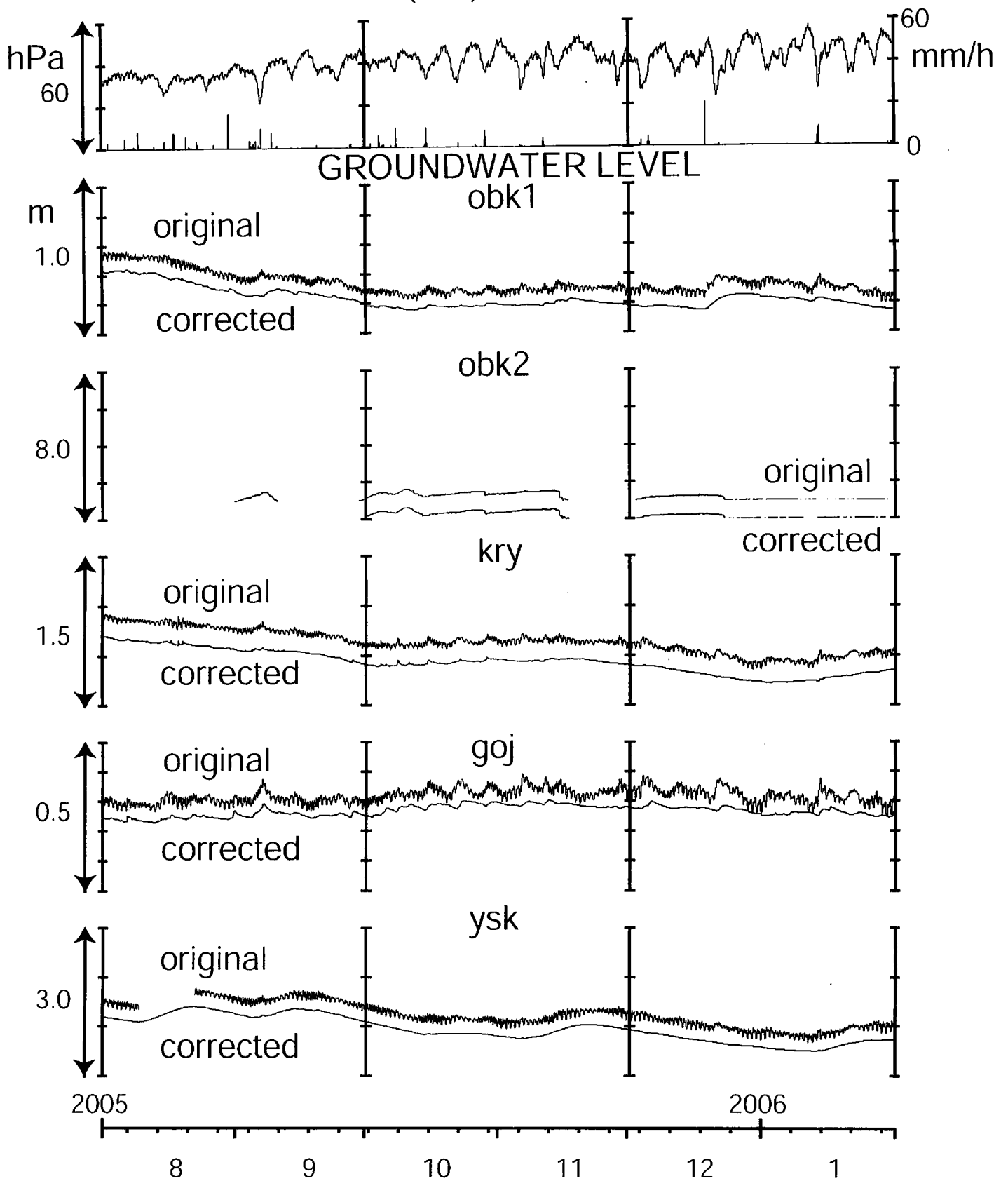


Fig.6

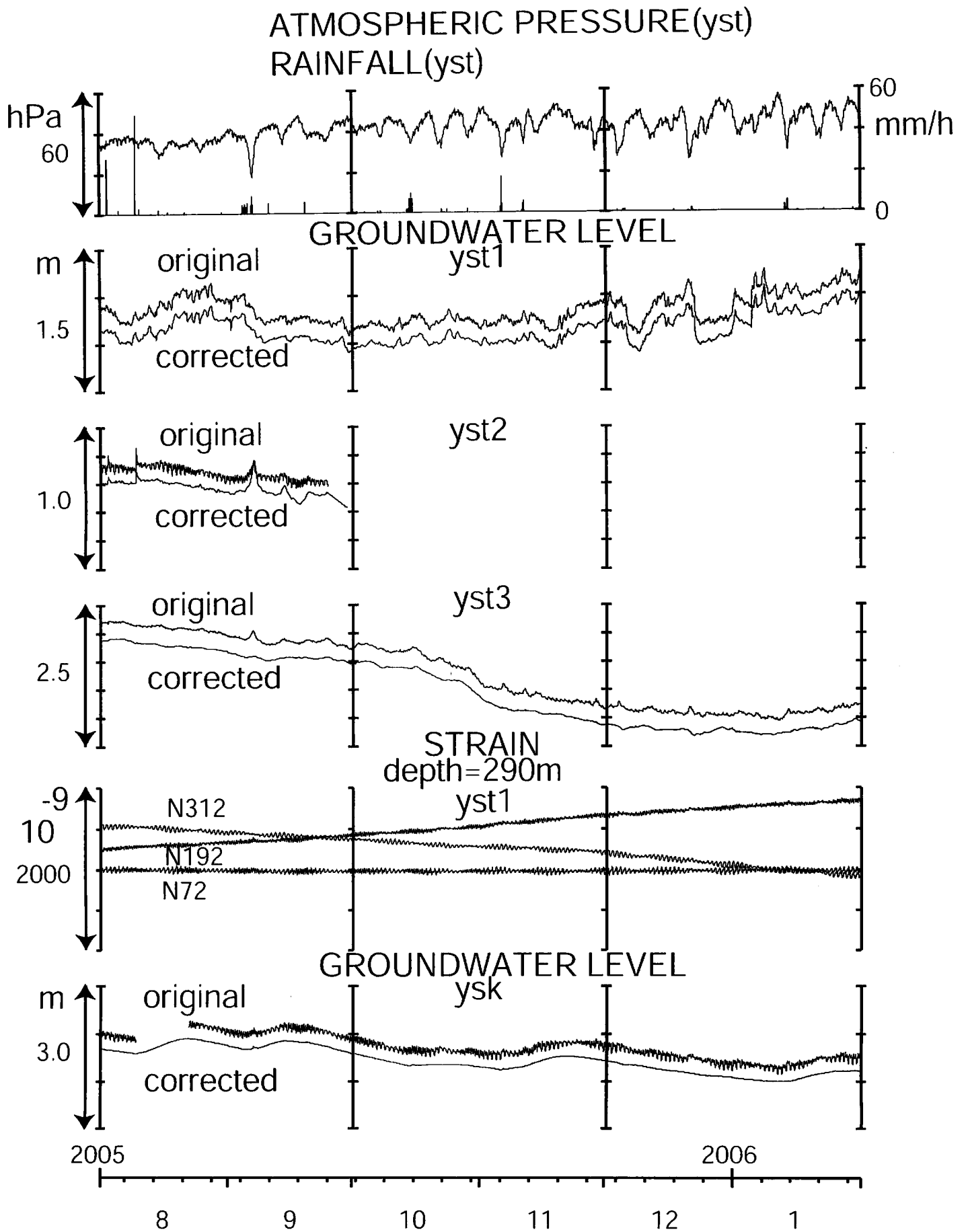


Fig.7

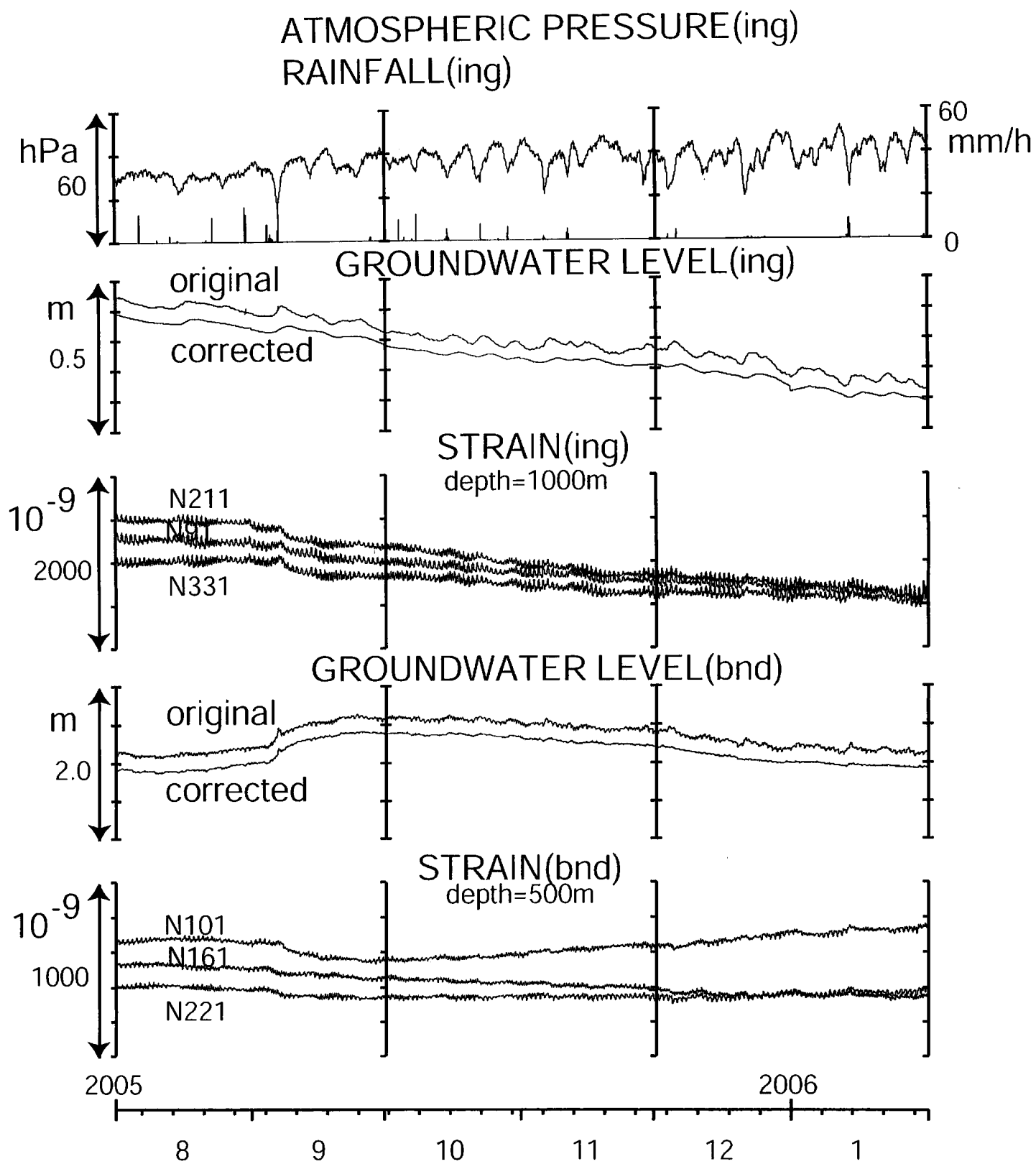


Fig.8

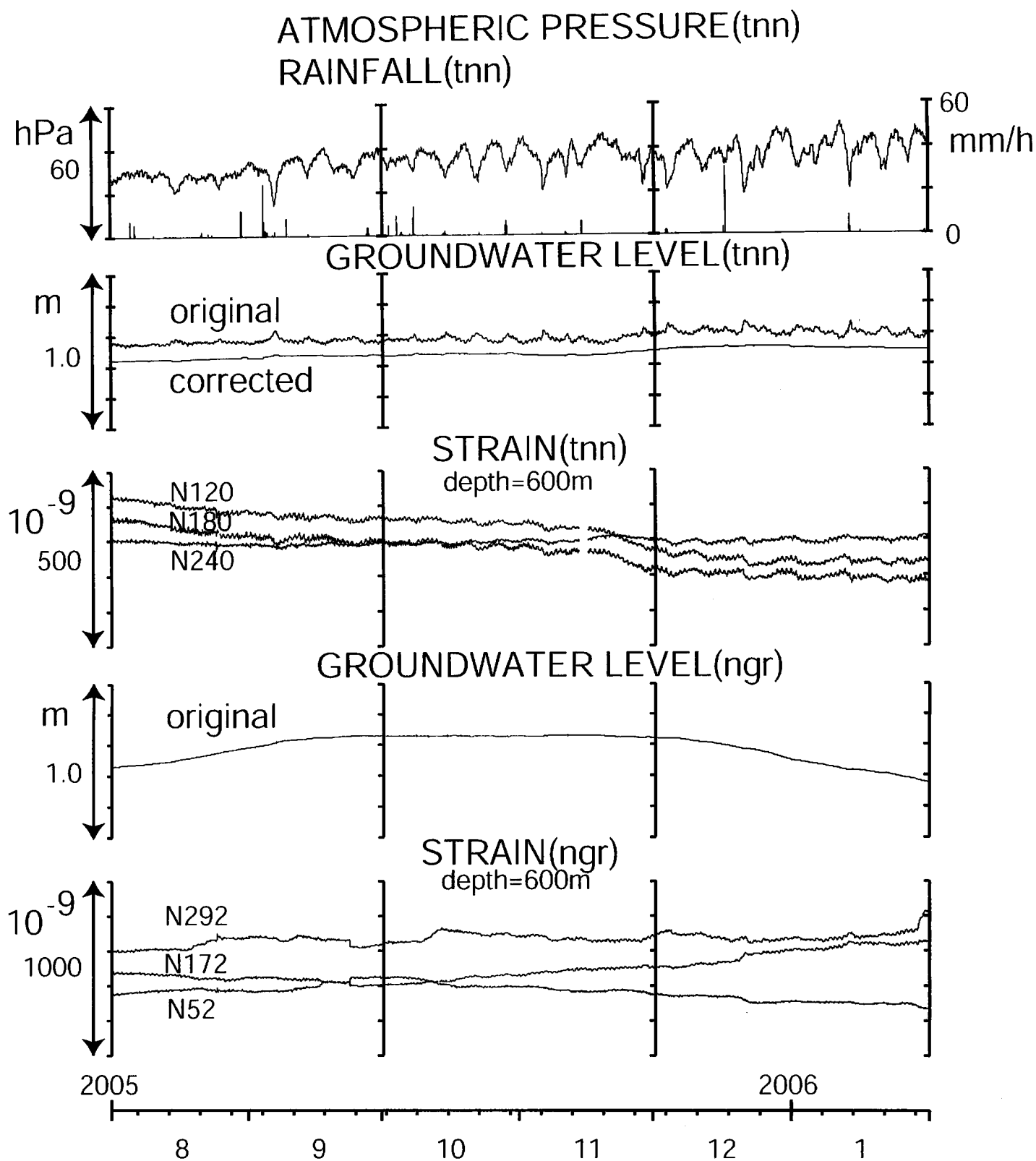


Fig.9

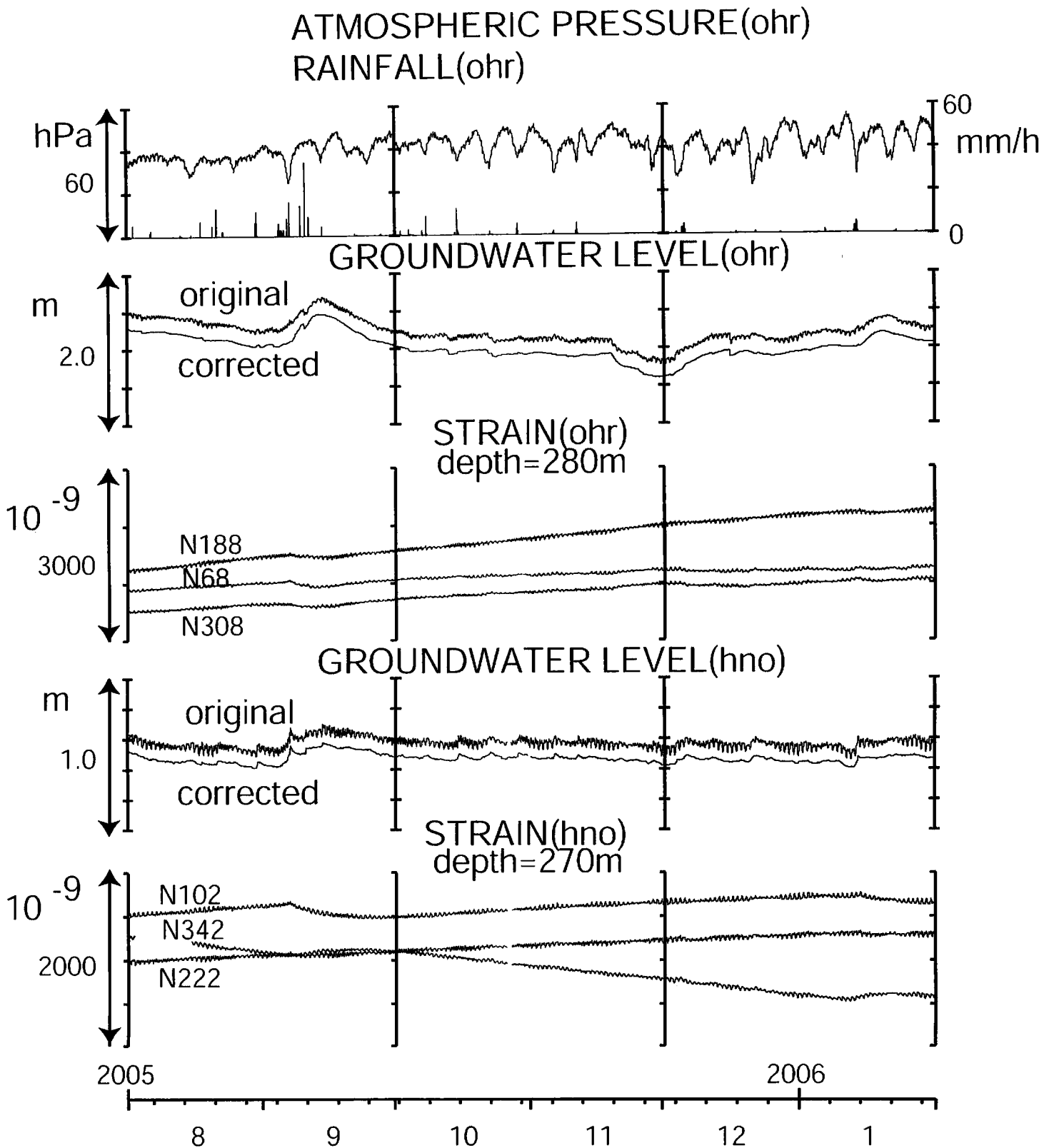


Fig.10

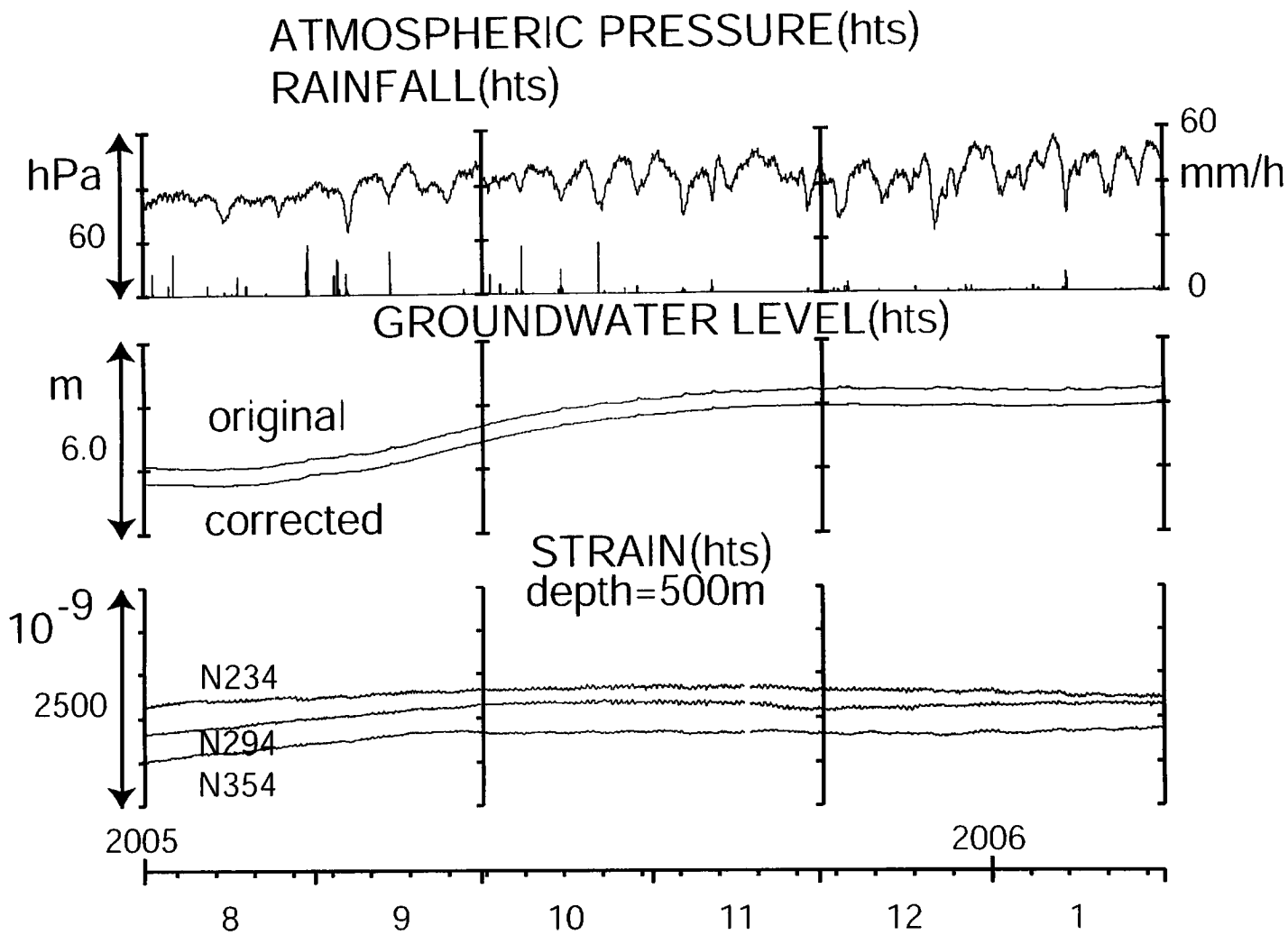


Fig.11